

## 研究ノート

## 青年期のジョン・アレクサンダー・マクドナルド

## ―アッパーカナダの反乱をめぐる一考察

木野 淳子

## キーワード

ジョン・アレクサンダー・マクドナルド カナダ首相  
アッパーカナダ植民地 一八三七年の反乱

ウィリアム・ライオン・マッケンジー

## 一．はじめに

カナダ自治領(Dominion of Canada)初代首相ジョン・アレクサンダー・マクドナルド(John Alexander Macdonald, 一八六七〜七三、一八七八〜九一年在任)は、二〇一五年に生誕二〇〇周年を迎えた。それを記念して、様々な視点からマクドナルド像を再構築する試みがなされてきた<sup>1)</sup>。マクドナルドは、一八一五年、スコットランドで生まれ、一八二〇年、五歳の時にアッパーカナダ植民

地(Province of Upper Canada, 現オンタリオ州南部)に移住してきた。奇しくも同じスコットランドから、同じ一八二〇年にアッパーカナダに移住してきたのは、もう一人のカナダ史上の有名人、ウィリアム・ライオン・マッケンジー(William Lyon Mackenzie)である。かたや後のカナダ初代首相に対し、カナダで在任期間が最長の首相、ウィリアム・ライオン・マッケンジー・キング(William Lyon Mackenzie King, 一九二一〜二六、一九二六〜三一、一九三五〜四八年在任)の祖父であり、急進的改革

青年期のジョン・アレクサンダー・マクドナルド（木野）

派のマッケンジーは、一八三七年に後のカナダである英領北アメリカ植民地を揺るがす事件を起こしたことで知られている。一八三七年に、ロワーカナダ植民地 (Province of Lower Canada、現ケベック州南部) 議会議長でありロワーカナダの改革運動のリーダー、ルイ・ジョセフ・パピノー (Louis-Joseph Papineau) が率いたロワーカナダの反乱と、マッケンジーが率いたアッパーカナダの反乱が起こった。どちらの反乱も住民から広く支持されず、直ちに鎮圧され失敗に終わった。しかし、これによりイギリス本国も英領北アメリカの変革の必要性を認識し、一八四八年にノヴァスコシア植民地 (Province of Nova Scotia)、および、アッパーカナダとロワーカナダを統合した連合カナダ植民地 (United Province of Canada、一八四一〜六七)<sup>(2)</sup> における責任政府の樹立につながるステップとなった。アッパーカナダの反乱は、二年にわたり散発的な蜂起やアメリカ合衆国からの侵入があったが、若きマクドナルドは、その発端であり、もともとよく知られている首都トロントでの蜂起を鎮圧した民兵隊の一員であった。

カナダ史学界においては、カール・バーガー (Carl Berger) のカナダ史学史研究によって述べられているように、伝記は研究者により第一次史料を使用してのジャンルとして確立されている<sup>(3)</sup>。そこで、まずこれまでに出版され

たマクドナルドの伝記および伝記的研究を紹介するとともに、それらの中でマクドナルドとアッパーカナダの反乱について、どのように扱われているかを検討する。そのうえで、マクドナルドがこの反乱にどのように関わったかを明らかにするとともに、この事件が鎮圧側に加わったマクドナルドにとってどのような影響を及ぼしたかを考察したい。マクドナルドの青年期の史料には量的な制約があるが、本稿では、アッパーカナダの反乱の状況や反乱後のマクドナルドの活動とあわせ、マクドナルドがこの反乱から受けた影響について、考察を試みる。

## 二、マクドナルド研究—伝記的研究を中心に

カナダにおいて初期に出版されたマクドナルドの伝記は、親族や友人、崇拜者によるもので、称賛に満ちていた<sup>(4)</sup>。一八九四年には、長年のマクドナルドの秘書であったジョセフ・ポープ (Joseph Pope) によって詳細な伝記が出版された<sup>(5)</sup>。二〇世紀に入ってからマクドナルドの伝記<sup>(6)</sup>の中でも重要なのは、カナダ史の泰斗、ドナルド・クレイトン (Donald Creighton) による二巻本のマクドナルドの伝記である<sup>(7)</sup>。クレイトンは、この伝記で、マクドナルドをカナダ史理解の鍵としてとらえ、マクドナルドこそが、イギ

リスとの関係を強化し、アメリカの影響からカナダを守り、カナダを大西洋から太平洋にまたがる大陸横断国家にした立役者とした。<sup>8)</sup>しかし、クレイトンは、カナダの建国における功績をすべてマクドナルドによるものとして、偏ったマクドナルド像を提示したとも指摘されている。

一九六〇年代後半以降には、マクドナルド自身の書簡などの史料に基づいて、実証的にマクドナルド像の修正が図られた。その筆頭がキース・ジョンソン (James Keith Johnson) である。ジョンソンは、二巻本のマクドナルドの書簡集と、そこに入らなかったマクドナルドとその家族、親族との書簡集を編纂するとともに、<sup>9)</sup>連合カナダ植民地首相としてのマクドナルドの貢献や、クレイトンがもっぱら注目したマクドナルドの政治家としての貢献に対し、史料から彼の実業家としての側面をも明らかにした。<sup>10)</sup>この時期は、他にドナルド・スウェインソン (Donald Swainson)、ピーター・ウエイト (Peter Busby Waite) による伝記もあるが、研究者による権威ある人名事典として知られている『カナダ伝記事典 (Dictionary of Canadian Biography)』において、ジョンソンとウエイトの共著によってバランスのとれた総合的なマクドナルド像が提示されたと定評がある。<sup>11)</sup>以降、マクドナルドについては、カナダ太平洋鉄道建設へのマクドナルドの貢献に焦点を当てたジャーナリスト

のピエール・バートン (Pierre Berton)、マクドナルドの心理的な側面を理解しようとしたバトリシア・フェニックス (Patricia Phenix)、また、マクドナルドを現代のカナダの文脈で理解しようとしたリチャード・グウィン (Richard Gwyn) があげられる。<sup>12)</sup>また、二〇一〇年一二月にトロントのライオンソン大学において開催されたマクドナルドに関する会議では、マクドナルドのカナダ史および現代カナダにおける役割を理解するため、マクドナルドと婦人参政権、先住民、中国系移民、「ナシヨナル・ポリシー」<sup>13)</sup>再考など、多方面からの報告があり、それが、マクドナルド生誕二〇〇周年を記念して一冊の本にまとめられた。<sup>14)</sup>

日本においては、政治家としてのマクドナルドに関する研究がある。大原祐子はマクドナルドの「ナシヨナル・ポリシー」とカナダ太平洋鉄道建設などの政策に関して、木村和男はコンフェデレーション (連邦結成) におけるマクドナルドの功績について、福士純は英帝国経済史の視点から、それぞれ検討した。<sup>15)</sup>木村は、マクドナルドとともに一八五四年に保守党 (公式名は自由・保守党 Liberal Conservative Party) を立ち上げ、後にマクドナルドをして「私の分身」と言わしめるほど強い協力関係にあったフランス系カナダ人のジョルジュ・エティエンヌ・カルティエ (George-Etienne Cartier) については、ロワーカナダ

の反乱において叛徒の一員であったことは言及しているが、マクドナルドがアップパーカナダの反乱で鎮圧側に加わっていたことには触れていない。<sup>16)</sup>

マクドナルドと一八三七～三八年のアップパーカナダの反乱のかかわりについては、これまで積極的に検討されたものは少なく、マクドナルドの死去直後の一八九一年に刊行された伝記では、この件に関し、全く言及がなかった。これに対しポーブは、本人から一八三七年の反乱鎮圧に加わったことを聞いたと記したが、目的地はトロントとしながらも、いつどこから出発したのかは明言しなかった。<sup>17)</sup> クレイトンは、一八三七年二月六日にキングストン(Kingston)に届いた首都トロントでの蜂起の知らせを受け、一〇日以内にキングストンで招集された民兵隊の一員としてマクドナルドが加わったであろうと考えた。<sup>18)</sup>

しかしながら、マクドナルド自身が、一八三七年二月七日に当時のトロント市郊外のモンゴメリ酒場に集まったマッケンジーと反乱の徒を打ち破った民兵隊の一員であったと認めていた。このことは、ジョンソンによる『オントリオ史(Ontario History)』での新たな史料、マクドナルドから友人で法律家のジェイムズ・ゴウワン(James Gowan)宛の書簡の紹介によって明らかになった。<sup>19)</sup> 近年出版された伝記では、この事実を踏まえているものもある。

る。グインは、この事実と言及しているものの、一八六一年二月に連合カナダの首相兼法務長官であったマクドナルドが、自らを民兵隊大臣に任命したことに關して、実際にトロントでの反乱において銃をかついだが発砲したわけではなく、軍事経験もほとんどなく、民兵隊での昇進を全く望まなかったなど、マクドナルドの軍隊への無関心さにもかかわらず、自らを民兵隊大臣に就任したこととの関連で述べるのみで、直接的に一八三七年の反乱の経験がマクドナルドにもたらしたものを検討はしていない。<sup>20)</sup> これに対し、ジェド・マーティン(Jed Martin)は、一八三七年の反乱がマクドナルドに及ぼした影響を積極的に評価し、この事件で、マクドナルドは様々な対立要因を抱えたカナダ社会を統治するため、争いを避ける統治術を学んだとしている。<sup>21)</sup>

### 三、マクドナルド一家のアップパーカナダへの移住と 青少年期のマクドナルド

一七六三年、イギリスがフランスから獲得したケベック植民地(Province of Quebec)は、アメリカ独立革命後、独立に反対した王党派や、その後土地を目当てに移住してきたアメリカ系移民により、まとまった英語系人口が誕生

し、一七九一年、フランス系のロワーカナダとイギリス系のアップーカナダに分割された。ナポレオン戦争終結により、ようやくイギリス本国からの移民が到着し始めたが、アップーカナダでは、本格的なイギリスからの移民の流入は一八三〇年代以降であった。スコットランドからの移民は、一八一五〜一八七〇年の期間中、コンスタントに英領北アメリカに流入し、アイルランドからの移民とともに、それまでのアップーカナダの社会構成を変化させた。こうしたスコットランド移民の中でも、マクドナルド一家は、比較的早い時期の一八二〇年にアップーカナダに移住してきた。

一八一五年に、ジョンは父ヒュー・マクドナルド、母ヘレン・マクドナルドの息子として、スコットランドのグラスゴーで誕生した。一家は、父親が商売に失敗したため、一八二〇年にヘレンの義兄、ドナルド・マクファアソン(Donald Macpherson)を頼って当時のアップーカナダ最大の町、キングストン<sup>(23)</sup>への移住を決めた。ヒューはキングストンでの商売にも失敗し、一八二四年には五〇キロ西の郊外にあるヘイ・ベイ(Hay Bay)村へ、それからさらに西のグレンノーラ(Glenora)に移り、商売も転々とした<sup>(24)</sup>。

そのような中でも、両親、特に母親は、息子ジョンに良い教育を受けさせようとした。マクドナルドは一八二五年

には姉妹と同じ学校に通ったが、両親は、より良い教育を求めて、一八二七〜二八年に彼をキングストンのミッドランド地区グラマースクール(Midland District Grammar School)へ通わせた<sup>(25)</sup>。当時のアップーカナダにおいては、十分な教育を受けられるのはエリートの子息が通う各地区のグラマースクールにおいてであり、学費および寄宿費を負担しても息子に良い教育を受けさせたいという両親の強い気持ちがあったのであろう<sup>(26)</sup>。また、このころキングストンで人口が増えつつあったプロテスタントのスコットランド系住民によって、一八二九年にスコットランド教会派による学校、当時としては珍しい共学の学校が創設されると、マクドナルドもここに転校して古典や一般教養を学んだ<sup>(27)</sup>。一八三〇年、一五歳になったマクドナルドは、キングストンの弁護士、ジョージ・マッケンジー(George Mackenzie)の法律事務所<sup>(28)</sup>の徒弟となった。数年後には、マッケンジーの事務所の出張所を任されるほどになり、いとこの法律事務所を手伝った後、一八三四年八月にコレラで急逝したマッケンジーの顧客を引き継ぐために、一八三五年八月、マクドナルドはキングストンに自分の法律事務所を開き、翌年二月六日には、正式に法廷弁護士の資格を得た<sup>(29)</sup>。

#### 四・マッケンジーの活動とその急進化

##### ―「マッケンジーの反乱」

二五歳の時、アッパーカナダに移住してきたW・L・マッケンジーは、一八二四年五月一八日に反政府系新聞『コロニアル・アドヴォケート (Colonial Advocate)』紙を創刊し、アッパーカナダの寡頭政、「家族盟約 (Family Compact)」を激しく批判した。とはいえ、当初はあくまでもイギリスの制度の枠組み内での訴えであった。一八二〇年代のアッパーカナダの人口の大半を占めたアメリカ系移民の政治的権利をめぐる「外国人問題」において、同植民地政府の頭越しに本国政府へ直接請願したことで改革派の主張が通ったことから、自らも一八三〇年代初頭には、アッパーカナダの様々な不満を訴えるため、同植民地中で請願運動を行った<sup>28)</sup>。彼は住民に大変人気があり、一八二八年には同植民地議会の議員に選出され、一八三四年にはトロントの初代市長にも選ばれた。一方、改革派が「外国人問題」において勝利したことで、一八三〇年代には、トリーによる改革派への反発は激化した。特にマッケンジーに対する攻撃は激しく、一八三一年一月から二年余りの間に、五回も議員除名されたほどであった。一八三三年以降、ア

メリカ合衆国の諸制度への志向が強まったマッケンジーは、一八三五年、『不平に関する第七報告 (The Seventh Report on Grievances)』をまとめ、議会の上院に当たる立法評議会は、任命制ではなく、アメリカの上院と同様に選挙制にすべきであると主張した。

さらに状況を悪化させたのが、一八三六年一月に新たにアッパーカナダ植民地副総督に着任したフランシス・ボン・ド・ヘッド (Francis Bond Head) であった。改革派が多数派を占めた議會を解散したヘッド副総督は、一八三六年の選挙で、マッケンジーら急進派だけでなく、穏健な改革派をも、「共和主義者<sup>リパブリカン</sup>」すなわちアメリカ的、ひいてはイギリスへの不忠者とレッテルを張り、自らアッパーカナダ中を回りイギリスへの忠誠を強烈に訴えた。その結果、この年の選挙では改革派は大敗し、リーダーのマーシャル・ビドウェル (Marshall Spring Bidwell)<sup>29)</sup>をはじめとした穏健な改革派も、マッケンジーも落選した。

その後、マッケンジーは、次第に自分の新聞において圧政に対する武力抵抗の必要性に言及し、制度的な改革の必要性も強調しはじめた。さらに一八三七年夏から秋にかけて、マッケンジーら急進派は議會外での抗議運動だけでなく、彼らを支持する民衆の軍事教練さえ行うようになって<sup>30)</sup>。一方、防衛側の民兵隊の方は、一六く六〇歳の男性は

皆、民兵隊に属していたが、訓練は年一回、ジョージ三世の誕生日の六月四日に行われ、農民や職人たちはアマチュア士官の命令にこたえて訓練を行うものの、十分とは言えず、まともな武器を持った者もわずかであった。

一八三七年十一月二三日、パピノーが率いたロワーカナダの反乱が勃発した。これに対抗するためアッパーカナダ内のイギリス軍が派遣されたので、マッケンジーは、その防衛上の隙をついて、パピノーの蜂起に呼応する形で、アッパーカナダで行動を起こせば、植民地政府を転覆させることができる考えた。しかし、パピノーの反乱も数日の内にほぼ鎮圧され、当時の通信事情からその鎮圧の知らせが届かないうちに一二月初めにトロントで起こしたマッケンジーの蜂起も、一二月半ばにマッケンジーの行動に呼応してアッパーカナダの西部、ロンドン地区(District of London)でチャールズ・ダンコム(Charles Duncombe)が率いた蜂起も直ちに鎮圧された。一八三八年の間、アメリカに亡命したマッケンジーや彼の支持者によって、散発的にアメリカからの侵入があったが、アッパーカナダ住民の大きな支持を得ることなく終結した。

アッパーカナダの反乱の発端となったトロントでの蜂起の経過は以下の通りである。マッケンジーは、一月第三週には、一二月七日に蜂起する計画を立てたが、支持者に

はあくまでも武器を持つての武装デモであると主張した。トロントの北部のマッケンジーらの本部、モンゴメリ酒場から武器を持って行軍すれば、トロント市内の大勢の住民がこれを支持し加わるであろう、というのがマッケンジーの主張であった<sup>⑤</sup>。しかし、十分な組織化、計画がなされないうちに、誤った情報を得て行軍を早めることにしたマッケンジーらは、一二月四日夜、マッケンジーを含む斥候部隊がトロントへ向かった。その時、マッケンジーらの武装蜂起のうわさを調べていた政府側のグループと遭遇してしまい、マッケンジー側の数少ない軍事経験者の一人が殺害された。これが最初の流血となった<sup>⑥</sup>。

一二月五日には、トロント市内の不穏な状況に、ヘッド副総督は、穏健な改革派として知られるロバート・ボルドウィン(Robert Baldwin)と、もう一人の改革派ジョン・ロルフ(John Rolph)の二人にマッケンジーとの休戦のための交渉を託したが、上手くいかず午後三時に交渉は決裂した<sup>⑦</sup>。そこでその日の夜、マッケンジーらはモンゴメリ酒場から再度トロントを攻撃しようと、一部の者とともに向かった。しかし、暗闇の中、二〇人ほどの見張りの守備隊に発砲され、パニックになり逃げだした。マッケンジーは止めようとしたが、多くの者は、自分たちが考えていた武装デモではないとわかり、その晩のうちに、あるいは朝に



青年期のジョン・アレクサンダー・マクドナルド（木野）

なると帰宅してしまった。<sup>(38)</sup>

一方、一二月四日から集まった志願兵に対し、ヘッドはマスケット銃を配り、さらに東はキングストン、西はハミルトン、ナイアガラ半島に援軍を要請した。五日朝、志願兵は二〇〇〜二五〇名になり、五日夜にはトロント市外から大規模な援軍も到着し始めて、ようやくヘッドは、七日にモンゴメリ酒場に鎮圧部隊を派遣することにした。

七日の戦闘はギャローズ・ヒル (Gallows Hill) あるいはモンゴメリ・ヒル (Montgomery's Hill) の戦いといわれるが、この日までに一五〇〇人に達していた鎮圧部隊は三方に分かれ、中央の部隊は大砲二台とともにヤング通り (Yonge St.)<sup>(39)</sup> を北上、そして左の部隊は現在のユニヴァーシティ・アヴェニュー (University Ave.) から、右の部隊は東の森林から、モンゴメリ酒場に向かい、大砲と一〇〇〇丁以上のマスケット銃による攻撃で、ほんの数分で反乱者たちを蹴散らした。<sup>(40)</sup> 一〇〇〇人以上かと思われた反乱者たちは、実際にモンゴメリ酒場に残っていたのは四〇〇人ほどで、戦闘に参加したのはさらにその半分ほどであった。モンゴメリの丘を下ってきた約一〇〇人は、鎮圧部隊の大砲を見ただけで森へ逃げ出し、大砲が数発撃ちこまれるとさらに逃げる、数回の一斉射撃の後には散り散りになって逃げる、という有様であった。マッケンジーも、五、六人と

ともにヤング通りを駆け上って逃げ、最終的にアメリカに亡命した。武器を持っていないので酒場の中にとどまっていた残りの者も、大砲を三発撃ち込まれ追い出された。その後、鎮圧部隊は反乱者たちを搜索したが、夕方五時頃、トロント市内に戻った。<sup>(41)</sup>

## 五、民兵マクドナルドの活動

それでは、マクドナルドはこのトロントでの蜂起の鎮圧にどのように加わったのか。ポーブによると、晩年マクドナルドは、「私は（一八）三七年にマスケット銃をかついだ」とよくそう語った。ある日、「彼は私に彼の部隊が行った長い行軍の話をしてくれた、どこからかは忘れたが、目的地はトロントだった。『その日はあつかった (The day was hot)、私の足は水ぶくれになった——私はただの疲れ果てた少年だった——そして、肩をすりむく古い火打ち式マスケット銃をあまりの重さで下に落としそうだったが、何とか仲間の疲れ知らずのいかめしい老兵に遅れないようにについていった。』と。」<sup>(42)</sup> ポーブの伝記では、行軍の時期が明確に述べられていないうえに、原文の hot の解釈によっては、それがその日の気温の暑さを指すのか、それともその日の熱気を指すのかが判然としないため、マクドナルドが



一八三七年の二月初めにトロントでの蜂起を鎮圧した民兵隊の一員であったかは明確ではなかった。そのため、クレイトンは、当時の交通事情では、六日にキングストンに反乱の一報が届いた後トロントに駆け付けたとしても、七日には間に合わないため、マクドナルドは地元で民兵隊に入ったと推察したようである。

マクドナルドが明確に一八三七年一月七日にモンゴメリ酒場への鎮圧部隊にいたことを認めたのは、一八八七年の友人ゴーワン宛の書簡の中であった。<sup>(45)</sup>マクドナルドとゴーワンは同い年で、ゴーワンは一八三二年にアップカーナダへ移住し、二人はともに法曹界に入ったという共通点があった。一八三七年当時、二人には面識がなかった。ゴーワンは一八五四年、マクドナルドによって連合カナダの行政区カナダ・ウェスト(旧アップカーナダ)の法務長官に任命され、以降、マクドナルドに法的な助言を続けた。<sup>(46)</sup>二人の間には、一八五五〇九年、二三〇通の書簡のやり取りがあったが、一八八七年一月七日、ゴーワンは次のような書簡を送った。

五〇年前、君がどんな活動に従事していたか、私は知らない。――が、半世紀前の今日、私は射撃が行われた森を抜けてモンゴメリの家(モンゴメリ酒場)に出動した部隊と一緒にいた。私には証しとなる傷もない

〔中略〕私が自慢できることは、逃げ出したい強い気持ちに逆らって、その家に入った最初の一人となるよう勢いのままに行動したことだ。<sup>(47)</sup>

これに対し、一月一三日付のマクドナルドからの返信はゴーワンを驚かせた。

それでは君はモンゴメリの丘にいたのだね。それなら我々は文武両面で同志というわけだ。私もそこにいたのだよ。私はモンゴメリの家に通じる大砲の背後の部隊の二列目か三列目にいたのだ〔中略〕行軍から戻って来た時ほど私の人生で疲れたことはなかったよ〔中略〕その反乱の週の間、私は〔中略〕〔ミッドランド地区〕コマーシャル銀行守備隊(the Commercial Bank Guard)に属していたのだ。<sup>(48)</sup>

「コマーシャル銀行守備隊」は「ミッドランド地区銀行(The Commercial Bank of the Midland District) トロント出張所を防衛するため、一八三七年一月四〜一七日の短期間活動した。マクドナルドは、一月四日に組織された同銀行守備隊の一員として名簿に名前があった。<sup>(49)</sup>とはいえ、マクドナルドがなぜ一月四日の段階で、トロントにいたのかについては、自らの弁護士としての仕事か、あるいは、父ヒューが前年、同銀行の銀行員に雇われていたことに関係あったのか、理由ははっきりしない。おそらく、キ

青年期のジョン・アレクサンダー・マクドナルド（木野）

ングストンの重要な金融機関のトロント出張所の防衛をするよう駆り出されたと考えられる。また、二人の書簡から、一二月七日、マクドナルドはヤング通りを北上してモンゴメリ酒場へ向かう中央の部隊に、ゴーワンは森林からモンゴメリ酒場に向かい、逃亡してきた叛徒を捕える右側の部隊に属していたことがわかる。

実は、訓練を欠いていた鎮圧部隊は、二台の大砲と一〇〇丁以上のマスケット銃という武器の力で訓練不足を補っていた。大量の武器を持つ鎮圧部隊を見て、また実際に大砲を撃ち込まれて、叛徒たちはあつという間に敗走したが、ゴーワンの書簡は、ほとんどまともな訓練もしないまま駆り出された鎮圧部隊の面々にも、大砲の発砲やマスケット銃による銃撃戦が、叛徒と同様の衝撃を与えたことを示唆している。

## 六・アッパーカナダの反乱後のマクドナルドの動向

マクドナルドは、主に民事弁護士であったが、一八三七年から一八三九年の二年間に限っては、もっぱら刑事事件を担当した<sup>①</sup>。一八三九年にミッドランド地区コマーシャル銀行の事務弁護士兼取締役となつてからは一切刑事事件から手を引いたが、この二年間に弁護を引き受けた内、三件

はアッパーカナダの反乱にかかわる事件であった。最初の事件でマクドナルドは、ミッドランド地区の住人八人が、トロントでの反乱勃発に呼応して武器を手に集まったため反逆罪に問われた裁判で、全員の無罪を勝ち取った<sup>②</sup>。次の事件では、マクドナルドは、後に嫌疑がはれたものの、キングストン郊外のヘンリー砦に投獄されていた一五人の反乱者の逃亡を助けたと疑われ、令状がないまま八時間も拘禁された看守のジョン・アシュレイ(John Ashley)の弁護をした。マクドナルドは、イギリス駐屯軍の指揮官ヘンリー・ダundas(Henry Dundas)大佐を相手に、損害賠償を認めさせた<sup>③</sup>。

最もセンセーショナルな事件は、一八三八年一月一二日、マッケンジーの行動を支援する一団が、アメリカからキングストンより約一〇〇km下流のプレスコット(Prescott)に侵入したことで、キングストン周辺は大変な騒ぎになった。誰もが弁護を断る中、マクドナルドは、リーダーのフィンランド出身のニルス・フォン・シュルツ(Nils Gutaf von Schoultz)<sup>④</sup>の弁護を引き受けた。外国人によるカナダ侵略ということで軍事裁判になったため、マクドナルドは直接法廷で弁護に立てず、結局シュルツは絞首刑になった<sup>⑤</sup>。

マクドナルドは一八三七年のアッパーカナダの反乱の鎮

庄に自分が加わったことを出世の手段としなかった。当時、従軍経験は出世への第一歩であったが、一八三八年、マクドナルドは民兵隊での昇進を拒否したのである。<sup>⑤⑥</sup>そもそも、マクドナルドはこの反乱の鎮圧部隊の一員であったことさえ、明確に発言することはめつたになかった。数少ない例が、マクドナルドがカナダ自治領首相に在任中の一八八四年、連邦議会上院において、ある議員が、その当時生存していた一八三七～三八年反乱を鎮圧した志願兵の名前、年齢、従軍した部隊などについて、カナダ自治領政府が情報を得ることを動議した時であった。マクドナルドは実にそつてなく、その必要はないと反対し、もし必要があるとしても、その件は旧アッパーカナダのオンタリオ州と旧ロワーカナダのケベック州がすべきことであると述べた。その際、「これは私自身にとつても一つの失望ではあります。というのも私も志願兵の一人で、マスケット銃をかついたのだ」と付け加えた。この動議については、野党自由党党首エドワード・ブレイク (Edward Blake)<sup>⑤⑦</sup> もマクドナルドに同意したので、動議は撤回された。マクドナルドは、ここでも反乱中に従軍したことを示唆するにとどめ、その時期や活動について明確に言及しなかった。

## 七. 結論と今後の展望

クレイトンは、一八三七年の反乱によって、政治家としてマクドナルドがイギリスの制度による支配とイギリスとの絆を支持する姿勢を確立させることになったとした。<sup>⑤⑧</sup>彼の主張するように、保守党の党首、首相として、イギリスとの関係や絆を無条件で支持しているなら、自らイギリス支配を守るため、銃を持って戦つたと再三主張しても不思議ではない。しかし、マクドナルドは、自身の一八三七年の反乱鎮圧への参加を出世の手段にもせず、積極的に言及することさえなかった。

それでは、マクドナルドが、反乱直後にあえて反乱に加担した、および加担したと考えらえた人々を弁護したのはなぜか。マクドナルド自身が、民兵として十分な訓練を受けないままトロントでの緊迫した状況に身を置き、大砲やマスケット銃による銃撃戦を目の当たりにしたことに大きな衝撃を受けたと考えられる。さらに、反乱直後には、反乱に全く関わりなかった人たちが大勢逮捕されることが各地で起こつた。大概はすぐに釈放されたが、中には事実上アッパーカナダを追放された人物もいた。<sup>⑤⑨</sup>このような状況下で、マクドナルドは、反乱という手段に訴えたマッケンジーら急進派に非はあるが、過度にイギリスへの忠誠を訴

え、政府と異なる意見を持つ者を不忠と決めつけ、彼らを追い込んで植民地を混乱状態に陥れたヘッド副総督のやり方に対しても反発し、そのためシュルツらの弁護を引き受けたと考えられる。

後年、マクドナルドは、この反乱に対する考えを次のように述べた。この反乱は同じ仲間である臣民同士の争いで、どちらにも正義はあったが、反乱者側は武力に訴えるという方法において間違いを犯したと。つまり、マクドナルドがこの反乱で学んだのは、アッパーカーカナダそして後のカナダが、民族的、宗教的、その他様々に対立する要素をはらんでいるが、それを武力に頼らず解決していくべきであるということではないか。それは、後に交渉や妥協によってカナダ自治領を誕生させ、牽引したマクドナルドの姿勢に表れた。

マーティンが指摘するように、マクドナルドへの一八三七年の反乱の影響を考慮することで、彼がロワーカナダの反乱者カルティエと手を携えてカナダ自治領誕生へ向けて協力したこと、様々な局面で発揮された彼の妥協の姿勢についても、新たな視点を与えられる可能性がある。その半面、マクドナルドの従軍経験だけに注目しては、彼の反乱後の行動や、反乱で得た教訓をより深く理解できない。なぜならば、一八二〇～三〇年代のアッパーカーカナダ

植民地での様々な状況の変化が反乱を招いたのであるが、その変化は、マクドナルドが居住していたキングストンを含むミッドランド地区でも顕著にあらわれていた。以前よりこの地域にあった改革派を支持する傾向が、一八三〇年代に入るとトリー支持に傾いたこと、それをもたらしたスコットランド系はじめイギリスからの移民の増加がアッパーカーカナダにもたらしたものも含めて、後のマクドナルドに与えた影響を考察する必要があると考える。それを今後の課題としたい。

- (1) カナダにおいては、二〇一〇年一二月、トロントのライアソン大学にて、様々な研究者が、多面的にマクドナルド像を構築するための会議を開催した。日本においても、日本カナダ学会第四〇回記念年次大会（於立教大学、二〇一五年九月一二・一三日）において、「マクドナルド生誕二〇〇周年」と題したセッションが設けられた。近年の伝記に関しては、本稿注(12)・(21)参照。
- (2) 一八三七年のロワーカナダ、アッパーカナダでの反乱の原因調査とそれへの対応につき、英領北アメリカ総督に任ぜられたダラム伯爵がまとめた『ダラム報告 Durham's Report』（一八三九年刊行）での勧告のうち、イギリスは、ロワーカナダとアッパーカナダの統合のみを受け入れ、一八四一年に両植民地は統合された。『ダラム報告』については、細川道久『カナダの自立と北大西洋世界―英米関係と民族問題』（刀水書房、二〇一四年）を参照。
- (3) Carl Berger, *The Writing of Canadian History: Aspects of English-Canadian Historical Writing Since 1900*, 2<sup>nd</sup> ed., Univ. of Toronto Press, 1986, pp.218-225.
- (4) マクドナルドの伝記についての史学史は、以下に詳しく。Patrice Dutil and Roger Hall, “A Macdonald for Our Times,” in Patrice Dutil and Roger Hall (eds.), *Macdonald at 200: New Reflections and Legacies*, Dundurn Press, 2014, pp.16-19. 最初の伝記は、一八八三年に出版された。Joseph Edmund Collins, *The Life and Times of the Right Honourable Sir John A. Macdonald: Premier of the Dominion of Canada*, Rose Publishing, 1883. マクドナルドの死去した一八九一年には立て続けにマクドナルドの甥、J・ペンントン・マクファーンソン(J. Pennington Macpherson)によるものなどが出された。Emerson Bristol Biggar, *Anecdotal Life of Sir John Macdonald*, John Lovell & Son, 1891; J. Pennington Macpherson, *Life of the Right Hon. Sir John A. Macdonald*, 2 vols., The Earle Publishing House, 1891; Joseph Edmund Collins, revised by Graeme Mercer Adam, *Canada's Patriot Statesman: The Life and Career of The Right Honourable Sir John A. Macdonald*, Rose Pub. Co., 1891.
- (5) Joseph Pope, *Memoirs of the Right Honourable Sir John Alexander Macdonald*, G.C.B., *First Prime Minister of the Dominion of Canada*, 2 vols., J. Durie & Son, 1894. ポープは、マクドナルドの書簡集を編纂した。Joseph Pope (ed.), *Correspondence of Sir John Macdonald; Selections from the Correspondence of the Right Honorable Sir John Alexander Macdonald*, Doubleday, Page & Co., 1921.
- (6) 後述のクレイトン以外では、ジョージ・ロバート・パーキン(George Robert Parkin)が、英帝国関係の強化を主張する熱烈な帝国主義者で、カナダ初のフランス系首相ウィルフリッド・ローリエ(Wilfrid Laurier, 自由党)が連続四度選挙に勝利した一九〇八年に、マクドナルドの伝記を出版した。George Robert Parkin, *Sir John A. Macdonald*, Morang & Co., 1908.
- (7) Donald Creighton, *John A. Macdonald: The Young Politician* (2 vols.) *The Young Politician*, Macmillan, 1952; Donald

- Creighton, *John A. Macdonald: The Old Chieftain*, Macmillan, 1955.
- (90) Dutil and Hall, "A Macdonald for Our Times," p.17.
- (91) James Keith Johnson (ed.), *The Letters of Sir John A. Macdonald, vol. 1, 1836-1857*, Public Archives of Canada, 1968; James Keith Johnson and Carole B. Steimack (eds.), *The letters of Sir John A. Macdonald, vol. 2, 1858-1861*, Public Archives of Canada, 1969; James Keith Johnson (ed.), *Affectionately Yours: The Letters of Sir John A. Macdonald and His Family*, Macmillan, 1969.
- (92) James Keith Johnson, "John A. Macdonald," in James Maurice Stockford Careless (ed.), *The Pre-Confederation Premiers: Ontario Government Leaders, 1841-1867*, Univ. of Toronto Press, 1980, pp.197-245; James Keith Johnson, "John A. Macdonald: the young non-politician," Canadian Historical Association, *Historical Papers*, 1971, pp.138-53; James Keith Johnson, "John A. Macdonald and Kingston Business Community," in Gerald Tulchinsky (ed.), *To Preserve & Defend: Essays on Kingston in the Nineteenth Century*, McGill-Queen's Univ. Press, 1976, pp.141-55.
- (93) Donald Swainson, *John A. Macdonald: The Man and the Politician*, Oxford Univ. Press, 1975; Peter Busby Waite, *Macdonald: His Life and World*, McGraw-Hill, 1975; James Keith Johnson and Peter Busby Waite, "Macdonald, Sir John Alexander," in *Dictionary of Canadian Biography*, vol. 12, Univ. of Toronto/Université Laval, 1990, <[http://www.biographi.ca/en/bio/macdonald\\_john\\_alexander\\_12E.html](http://www.biographi.ca/en/bio/macdonald_john_alexander_12E.html)> July 10, 2015.
- (94) Patricia Phenix, *Private Demons: The Tragic Personal Life of John A. Macdonald*, McClelland & Stewart, 2006; Richard Gwyn, *John A.: The Man Who Made Us: The Life and Times of John A. Macdonald: 1815-1867*, Random House, 2007; Richard Gwyn, *Nation Maker: Sir John A. Macdonald: His Life, Our Times: 1867-1891*, Random House, 2011.
- (95) 「ナショナル・ポリシー」は、低迷するカナダ経済の回復のため、マクドナルドが一八七九年に採用した保護関税政策。
- (96) 大原祐子『カナダ史くの道』(山川出版社、一九九六年)。
- (97) 木村和男『連邦結成—カナダの試練』(日本放送出版協会、一九九一年)。
- (98) 福士純『カナダの商工業者—イギリス帝国経済—一八四六—一九〇六』(刀水書房、二〇一四年)。
- (99) 木村和男『連邦結成』三四頁。木村和男編『カナダ史』(山川出版社、一九九九年)一六五頁。
- (100) Pope, *Memoirs of Macdonald*, vol. 1, p. 9.
- (101) Creighton, *The Young Politician*, pp.47-48.
- (102) James Keith Johnson, "Sir James Gowan, Sir John A. Macdonald, and the Rebellion of 1837," *Ontario History*, LX, 1968, pp.61-64.
- (103) Gwyn, *John A.: The Man Who Made Us*, pp.248-249.
- (104) Ged Martin, *John A. Macdonald: Canada's First Prime Minister*, Dundurn Press, 2013, p.33.



- (22) 一七八四年に王党派によって建設されたキングストンは、アッパーカナダの首都の立場はヨーク(York, 後の Toronto)に奪われていたものの、当時は人口もヨークより多くオンタリオ湖とセントローレンス川をつなぐ輸送の中心地としても、イギリス駐屯軍への物資の補給地としても栄え、アッパーカナダの金融と商業の中心地であった。一八二四年の人口では、ヨークは一六八五人、キングストンは二二三六人。ただし、一八三〇年以降は人口でもヨークに抜かれる。Frederick H. Armstrong, *Handbook of Upper Canadian Chronology*, Dundurn Press, 1985, p.272. 王党派は、一七九一年のアッパーカナダ創設時、当然キングストンが植民地の首都になるべきだと考えていた。しかし、アメリカとの国境に近いという理由で、ジョン・シムコー(John Graves Simcoe)初代副総督は、ニューアーク(Newark, 現在の Niagara-on-the-Lake)それからヨークを首都とした。キングストンは、多くの人口を支える農地がないため、一八一五年、一八二九年のキングストンを首都にしようという動きもうまくいかなかった。ようやく一八四一年に連合カナダの首都になったが、一八四四年に首都はモントリオールに移った。
- (23) Martin, John A. Macdonald, pp.17, 21; Creighton, *The Young Politician*, p.12.
- (24) Johnson and Waite, "Macdonald,"; Creighton, *The Young Politician*, pp.13-14.
- (25) Martin, John A. Macdonald, p.22.
- (26) Johnson and Waite, "Macdonald,"; Creighton, *The Young Politician*, pp.15-18.

- (27) マクドナルドが一八三五年に法律事務所を開いたことに關しては、まだ年齢が二一歳に達しておらず、おそらく父親が年齢を一年詐称することに同意したと思われる。Martin, John A. Macdonald, p.26. 翌年の一月一日の二一歳の誕生日後、マクドナルドは試験に通り、一八三六年二月六日に正式に法廷弁護士の資格を得た。Chronicle and Gazette, March 5, 1836, in Creighton, *The Young Politician*, pp.36-37.
- (28) アッパーカナダの支配層は、一八二二年戦争前に、人口の八割が王党派以外の土地目当てのアメリカ系移民になっていたことを憂慮していた。戦後も、アメリカからの移民が再度流入してきたことで、アメリカ系移民の影響力をそぐために、彼らを「外国人」扱いして、政治的権利を奪おうとした。一八二〇年代には、一八一〇年にアメリカからアッパーカナダに移住してきたバーナバス・ビドウェル、マーシャル・ビドウェル親子の議員資格の有無をきつかけに、アメリカ系移民の帰化の必要性をめぐる、植民地を二分した「外国人問題」論争が起こった。マーシャル・ビドウェルは、一八二八年の帰化法制定に尽力し、アッパーカナダのアメリカ系移民の政治的権利の剥奪を阻止した立役者であった。ビドウェルは、一八二八年に改革派が初めて多数派となった議會で、初の改革派の議長を務めた。「外国人問題」については、以下を参照のこと。木野淳子「一八二〇年代のプレスに見る『外国人問題』論争とアッパーカナダ植民地住民」『カナダ研究年報』二二号(二〇〇一年、三九〜五九頁)。
- (29) 一八三〇年代のマッケンジーの請願運動については、以

青年期のジョン・アレクサンダー・マクドナルド（木野）

下を参照のこと。木野淳子「ウィリアム・ライオン・マッケンジーの議員除名とアッパーカナダ植民地における一八三二―三三年の請願運動」『カナダ研究年報』二六号、二〇〇六年、三九―五八頁。

(30) 木野淳子「マッケンジーの議員除名」、四四―四七頁。

(31) ビドウェルについては、本稿注(28) 参照のこと。

(32) Colin Reid and Ronald J. Stagg, *The Rebellion of 1837 in Upper Canada: A Collection of Documents* (以下 *The Rebellion*), Carleton Univ. Press, 1985, p.xxxv. 本書は、イントロダクションと詳細な注を付したアッパーカナダの反乱の史料集である。

(33) Creighton, *The Young Politician*, p.47.

(34) Reid and Stagg, *The Rebellion*, p.xxxviii.

(35) *Ibid.*, p.xl.

(36) *Ibid.*, p.xlii.

(37) ロブート・ボルドウィン は、父ウオーレン・ボルドウィン (Warren Baldwin) とともに、責任政府の樹立を早くからイギリス本国に訴えていた。ロルフは、「外国人問題」において、ビドウェルとともに中心的役割を果たしたが、このトロントの蜂起では、ひそかにマッケンジー側についており、一二月六日、アメリカに亡命した。*Ibid.*, pp.xlvi-xlvii; “B31 W. L. Mackenzie’s Account of the Flag of Truce Incident, 5 December,” in *ibid.*, p.149; “B34 Petition of Samuel Lount to Sir F. B. Head, 10 March 1838,” in *ibid.*, p.151.

(38) “B38 W. L. Mackenzie’s Account of the Piquet Incident, 5 December,” in *ibid.*, p.157; “B39 Statement of James

Latimer,” in *ibid.*, p.158.

(39) *Ibid.*, pp.xliii-xliv; “B18 John Beverley Robinson’s Comments on Preparations in Toronto,” in *ibid.*, p.132.

(40) *Ibid.*, pp.xliv-xlv; “B39 Statement of James Latimer,” in *ibid.*, p.158.

(41) 一七九四年にアッパーカナダの首都をヨーク(トロント)に移した際、シムロー副総督によつて、シムロー湖まで伸びる軍用道路とつづ建設された。現在でもトロントの主要道路の一つ。

(42) Reid and Stagg, *The Rebellion*, p. liv; “B60 The Rebel Defeated,” in *ibid.*, p.178.

(43) *Ibid.*

(44) Pope, *Memoirs of Macdonald*, vol.1, p.9.

(45) Johnson, “Gowan, Macdonald, and the Rebellion of 1837,” pp. 61-64.

(46) Gowan to Macdonald, December 7, 1887, in *ibid.*, p.61; Desmond H. Brown, “Gowan, Sir James Robert,” in *Dictionary of Canadian Biography*, vol. 13, Univ. of Toronto/Université Laval, 2003-, ([http://www.biographi.ca/en/bio/gowan\\_james\\_robert\\_13E.html](http://www.biographi.ca/en/bio/gowan_james_robert_13E.html)), August 27, 2015.

(47) Gowan to Macdonald, December 7, 1887, in Johnson, “Gowan, Macdonald and the Rebellion of 1837,” p.61.

(48) Macdonald to Gowan, December 13, 1887, in *ibid.*, pp.62-63.

(49) *Ibid.*, p.63. “シムセント地区ローヤル銀行は一八三二年に、キングストンで創立された金融機関” 杉本

公彦『カナダ銀行史―草創期から二〇世紀初頭まで』（昭和堂、二〇〇七年）七三〜七四頁。

- (50) Johnson, "Gowan, Macdonald and the Rebellion of 1837," p.63, footnote 8.

- (51) Gwyn, *John A.*, p.49.

- (52) *Ibid.*, p.51. キングストンの新聞は、「四人たちは、本植民地で最年少の法廷弁護士の一人であるが、弁護士として急成長中のJ・A・マクドナルド氏によって大変な巧妙さと能力で弁護された」と評した。*Chronicle and Gazette*, 11 July 1838, cited in Creighton, *The Young Politician*, p.54.

- (53) Creighton, *The Young Politician*, pp.56-58; Martin, *John A. Macdonald*, pp.34-35.

- (54) Ronald J. Stagg, "Schultz, Nils von," in *Dictionary of Canadian Biography*, vol. 7, Univ. of Toronto/Université Laval, 2003-, <[http://www.biographi.ca/en/bio/schultz\\_nils\\_von\\_7E.html](http://www.biographi.ca/en/bio/schultz_nils_von_7E.html)> August 6, 2015. シュルツの出自については、フィンランド生まれであるが、生後一年でスウェーデンに行っただため、スウェーデン生まれとされている場合がある。Gwyn, *John A.*, p.52. また、一八三六年にアメリカ入国時、自らポーランド人と申告したため、ポーランド人とされている場合もある。Creighton, *The Young Politician*, p.55.

- (55) シュルツはマクドナルドの親身な弁護に感謝して財産の一部を残そうとした。しかしマクドナルドは、謝礼の申し出は断った。Creighton, *The Young Politician*, pp.65-68; Gwyn, *John A.*, pp.52-53. ベントナルズについて

この裁判は忘れたいものだったようで、最晩年になっても、シュルツの話の詳細を覚えていた。Pope, *Memoirs of Macdonald*, vol.1, pp.9-10.

- (56) Gwyn, *John A.*, pp.248-249.

- (57) *Official Report of the Debates of the House of Commons of the Dominion of Canada, 2<sup>nd</sup> Session, Fifth Parl.*, 1884, McLean, Roger, p.89.

- (58) Creighton, *The Young Politician*, pp.40-42.

- (59) 改革派のリーダーの一人ビドウェルは、一八三六年の落選後は政界から引退していた。しかし、ヘッドは、彼のマッケンジーへの加担を疑い、半ば脅して一八三七年一月九日にアッパーカナダから事実上追放した。ビドウェルとマクドナルドとのかわりについては、別稿を記したい。

- (60) Martin, *John A. Macdonald*, p.34.

(東京外国語大学兼任講師)